

三十路と
手コキと
上海と

ケイキ



序章：人の可能性、持たざる者の強さ

二十代の最後の日、僕は友人達と上海にいた。その国の人たちは、余りにも力強く活力に溢れ、僕たちが知らない人間としての在り方を示しているようだった。



雑技団を鑑賞しホテルに戻った僕は、まだ感動と興奮から冷めずにいた。人の可能性は無限なのではないかと、そんな子どものようなことすら考えてしまう。だが、それに比べて今の自分はどうか。明日で三十歳になるというのに、自分には何ができるのか？彼女も貯金もなく、ただ日々追われて過ぎる時間。終わる二十代。焦りでも憤りでもなく、ただ無常観だけが身を包む。そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、友人が僕に語りかけてきた。

「せっかく上海に来たのに、行かないの？」

どこに行くのか？そんな野暮なことは言わない。それが大人の会話だ。

正直なところ、ここ最近薄れていた人間としての欲求が、この国に来てからというもの少し蘇ってきている気がしていた。異国の空気がそうさせるのか、それとも二十代の有終の美か。初めての海外旅行の思い出として、それもアリかもしれない。それに、彼女のいる友人達には真似のできないことだ。何も持たない僕が提供できるネタにもなる。いつのまにか、そんなことを思い始めている自分がいた。

しかし、重要な問題が残されている。どうやって店の情報を得るのか。

「誕生日プレゼント。これで調べればいい」

悩む僕に、彼は自分の携帯電話を渡してきた。仕事の早い友人は海外パケットの申し込みを済ませていた。

彼の携帯を受け取り、僕は「上海 風俗」とGoogleに打ち込んだ。

第一章：徘徊する冒険者、直感か幸運かを決めるのは神ではなく

30歳の朝、僕は冒険の旅に出た。

言葉がほとんど通じない異国の地を、一人で行動するという冒険に。だが、目的地はホテルからそう遠くはない。住所もはっきりわかっている。辿りつくことは容易いだろう。問題は、到着してからだ。

朝の僕は、そう思っていた。

地下鉄を乗り継ぎ、昨晚調べた店の付近まで辿りついた。期待と不安で高鳴る胸を抑えながら、早歩きで向かう。よく見るとほとんどの建物に住所の札が貼ってある。さすが上海。こういう細かなところまで近代化が進んでいる。

建物の番号が、目的の番号に少しずつ近づき、僕の鼓動は早くなる。そして、僕が探していた番号と重なった。

様子がおかしい。確かに目的地に辿りついたはずなのに、ここは立派なホテルだ。名前も違う。結論は既に出ていた。店が潰れたか移動したかで、建物が変わったのだ。

しかし、ここまで来てそう簡単に引き下がれない。もしかしたら、何か見つかるかもしれない。そう信じて探し歩くことにした。

この町には何かある。僕の中の何かがそう告げていた。根拠は何もない。だけど、僕は何かに引き寄せられるように、大通りを歩き続けた。

そして、僕はとある看板を見つけた。



日本語にエロスを感じたのは初めての経験だった。間違いない。これは、そういうお店だ。しかし、よく何も分からずここまで来れたものだ。これは僕の直感が冴えていたのか、それともた

だ運が良かっただけなのか。神のみぞ知る、というやつか。
いや、神様はそんな事どうでもいいだろう。

看板に従って、店の方に歩く。期待と不安が高まる。しかし、目的地に近づくにつれ、後者の比率が大きくなっていく。果たして、大丈夫なのか。「言葉」「逮捕」「病気」。いろいろな不安が駆け巡る。

なるほど。今回の冒険のボスは「弱い自分」というわけか。

問題は、到着してから。

そう、朝の自分は正しかった。

いま、僕には、冒険者としての覚悟が問われている。

第二章：入郷随俗、自由で不公平な選択



たどり着いた。僕はついに、ここまで来たのだ。

この世に生まれ出でて三十年目。その初めての日に、艶やかな異国の館に足を踏み入れる。

階段を上ったところには、受付の男性らしき人がいた。

僕は言う。

「Can you speak English？」

「・・・チッ」

あれ？いま舌打ちされた？

ねえ、仮にも客商売で、それは無いんじゃないの？

不満げな顔をする僕を尻目に、男は一度受付の奥に入り、パンフレットを持って出てきた。

そして、それを僕に見せてこう言った。

「・・・ン」

ああ、なるほど。これを見て選べ、ということなのか。

気を取り直して、パンフレットをしてみる。

Aコース：都市全体オイルマッサージ 498元／90分 598元／120分（男性保養）

Bコース：腎臓保養＋男性保養 468元／80分

Cコース：タイ式マッサージ 298元／90分（男性技師のみ、予約必要）

Dコース：帝王マッサージ（両手に花） 688元／90分

・・・完全に日本語じゃねえか！日本人ってバレバレかよ！
というより、看板の出し方といい、客層は日本人がほとんどなのかもしれない。
もう一度気を取り直して、パンフレットをよく見てみる。

僕の目に、「男性保養」という文字が飛び込んできた。

ああ、間違いない。これで、間違いない。

「両手に花」という書き方がとても気になるが、オーソドックスであろうと思われるAコース90分コースに決めた。

僕がそこを指差して受付男性に見せると、男性は首を横に振る。

・・・どういう意味だ？

男性が何か言っているが、全くわからない。

男性はもう一度受付の中に入り、今度は女性を連れてきた。

華やかな中国服に身を包んだ若い女性だ。おそらくこの人がマッサージ技師なのだろう。

「これ、だめ」

彼女はこう言い、90分コースを指差す。そして120分コースを指差して言った。

「こっち、だいじょうぶ」

なるほど、そういうことか。

そして、女性の方が、日本語がわかるのか。

なるほど・・・。そういうことか・・・。

「OK！」僕は即答した。

郷に入っては郷に従え。少し腑に落ちないが、細かいことは気にしない。

僕は、彼女に連れられて、個室に入っていった。

第三章：リスク管理、待ちという戦法

ここは明らかに高級店だ。に入った瞬間に、そう確信した。
部屋の隅々まで行き届いた高級感が、僕を安心させる。



そして、カプセルのようなシャワールーム。
近代的な設備とエキゾチックな雰囲気とが織り成す絶妙な不協和音が、只ならぬ妖しさを醸し出している。



部屋の設備に気を取られている僕に、マッサージ技師の彼女は言った。
「すこし、まって、ください」

妖しげな部屋で一人残され、僕は考える。

俺、結構すごいこと、してね？

だって、言葉もわからない外国の風俗に来てんだぜ？

ぼったくられる可能性だって、最悪逮捕される危険性だって、あるんだぜ？

しかし、冷静なもう一人の自分はこう言う。

余裕だって。日本語も少し通じてたし。

それに、ここは風俗じゃない。ちょっと相場より高いマッサージ屋さんだ。

初めての海外旅行&30歳の誕生日に良い土産話ができるじゃないか。

そんな自分会議をしている間に、マッサージ技師のお姉さんが戻ってきた。

「どうも」

いかにも日本人らしいことしか言えない僕。なさけない。

そんな僕を気にすることなく、彼女は僕に「服を脱げ」というようなジェスチャーをする。

そうか、こういう複雑な(?)日本語までは使えないのか。

僕は指示された通り、シャツを脱ぐ。

ズボンも脱ぐべきかどうか迷っていると、「下も脱げ」というような指示をされたので、僕は恥ずかしがりながらズボンを下ろした。

さて、ここからが問題だ。

トランクスも脱ぐのか？

脱いだ方がいいのか？脱がない方がいいのか？

どっちが中国流なんだ？

脱いだときのリスク、脱がないときのリスク。圧倒的に前者の方が大きい。

それに比べ、メリットはさほど無い。

よし、ここは「待ち」しかない！

先程よりも強く、速く、かつ冷静な自分会議を終え、僕はパンツのまま仁王立ちをする。

すると彼女は、うつ伏せで寝るようジェスチャーをした。

よっし！脱がなくて正解だったぜ！

そして、僕は彼女に従い、エキゾチックなベッドの上で横たわった。

第四章：絶妙な摩擦係数、ジェスチャーの限界（近日公開予定）

【次回予告】

言わずもがな、オイルの摩擦係数はローションよりも大きい。
しかし、マッサージという点において、摩擦係数は小さければ良いというものではない。
そして、マッサージとは、血流を良くすることである。
それが何を意味するのか。

この身をもってその意味を理解したとき。

僕は新しい境地に達することになる。